

明中瓦版

令和8年5月号

小中一貫校 彩和学園
富田林市立明治池中学校
校長 堤 周作



出会いと別れ ～「慣れる」ということ～

鶯のさえずりが聞こえる中、8日に新たに赴任された先生の言葉に目を輝かせ、9日には7人の離任される先生の明中への思いを神妙な面持ちで聞き、涙を浮かべ…。この2日間の生徒の表情がとても印象的で、社会には出会いと別れがあることを実感したようです。

生徒にも出会いと別れがありました。しかし本格的に始まった授業や休み時間の様子を見ると、新しい友だちや先生と繋がっていこうとする意志が感じられます。昨年度末とは目つきや姿勢が違い、キラキラしている生徒が多く、心も態度も行動も一つ成長し、頼りがいのある人になりつつあるように見えます。個々で差はありますが、全体としていいスタートを切ったように思えます。

ところで、出会いと別れは生徒の成長に欠かせないものであり、教職員にとっては最大の研修と言われます。しかし当事者はプレッシャーがかかるものであり、全ての生徒や転出入の先生には、それぞれの学級や職場（学校）に早く「慣れて」ほしいと願います。その「慣れる」とは、経験を重ねて様々な対応に習熟することですが、この説明では抽象的で実感が伴いません。そこで、「慣れる」を「着慣れる」という言葉に置き換え、その過程を具体的に思い描いてみます。

新しい服は、肌触りが“ごわごわチクチク”して着心地が良くないことがあるが、しばらく着ているとそうした不快感が解消されて着やすくなる、それが「着慣れる」。この“ごわごわチクチク”の原因である直線的な繊維の出っ張りは、着る回数を重ねる度にだんだんと引っ込んだり丸まったりして突起が目立たなくなり、肌を刺激する強さや回数が減ってくる。

このように、私たちにとって服を「着慣れる」とは、“服が私たちの身体に合わせて繊維の突起をなくしてくれる”ことですが、人が組織（学級等）に「慣れる」とは、“両者が相手の突起を受けとめられるようになる”と考えることができるでしょう。個人は相手の習慣への対応を身に付け、相手の側も新たに知り合った人への対応を獲得する、という二つの変化が起きています。

生徒は新しいクラスで、新しい友だちの様々な「突起」をうまく受けとめる「凹み（へこみ）」を自分の中に作る、と同時に、新しい友だちも「突起」をうまく受けとめる「凹み」を設ける。それが繰り返された結果、どちらも「突起」のせいで肌が刺激される不快感“ごわごわチクチク”を感じなくなる、それが「慣れる」ことだと考えます。だから、よく言われる「慣れるまでが大変」という言葉は、両者が自分を変えなければならないのだから、まさにその通りです。

でも、「慣れる」には、うれしい贈り物がついてきます。「着慣れた」服は古くなって捨てがたいもの。それは、私たちが「突起を感じない服」をまるで自分の身体の一部のように感じ、深い愛着を抱くからです。「慣れる」ことは、単に不快感が消えるだけでなく、自分という肉体を超えて広がったような心持ちを産みます。そのようにして、生徒も教職員も学校も一回り成長し、一生の思い出がつくられていくのだと思います。

「生徒たち、転出入した教職員の皆さん、『慣れる』までとても気を遣い大変だろうけど、自分のペースで頑張って！」と、心の中でつぶやきながら、生徒や先生たちを日々、眺めています。

【本校(彩和学園)は、富田林市立学校唯一の「コミュニティ・スクール」です～】

学校と地域住民が力を合わせて学校を運営することを可能となる「学校運営協議会制度」を活用し、「地域とともにある学校」への転換を図る仕組みです。本学園の運営に地域の皆様の声を生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めています。

〔本制度を活用した、地域の皆様から中学校への支援の事例〕

キャリア教育面接練習、家庭科裁縫実習、ミュージックフェスタ伴奏支援 等

小中合同⇒English Meeting 審査、拡大クリーン作戦、あいさつウィーク 等

※年度初めのお忙しい中、家庭訪問にご協力いただき、感謝申し上げます。

※本校HPを是非、ご覧ください。随時、様子をアップしています。

明治池中HP



彩和学園HP

